

4. 専門家のプロジェクト参画と実践の効果

本事業では、3年間を通じて、様々な専門家の方々に委員や検討メンバーとして参画していただき、プロジェクトの推進・運営に多大な力をいただいた。

ここでは、事業推進者の目線で本プログラムを実践した専門家の方々から所感を寄せていただいた。

「子どもたちの反応を見ながら使えるフリップ」

牧野 ふみよ 公益社団法人 日本家庭園芸普及協会認定 グリーンアドバイザー
<http://www.kateiengei.or.jp/>

私は地元大田区で、花とみどりのまちづくりNPOを運営しており、その活動の一環で、小中学校での総合学習や課外活動のサポートをさせていただくことがある。その中で「どこでもフリップ」を使ってみた。

今の子どもたちは、小さい頃から「かんきょうもんだい」や「ちきゅうおんだんか」ということばに触れて育っていることから、こうしたキーワードを出しても、唐突感なく受け入れてくれるのだが、導入がクイズ形式になっているフリップには、いつもよりも食いつきよく、集中して話を聞いてくれた。紙芝居形式、というのも、親しみやすいのかもしれない。

「どこでもフリップ」は、全編通してのストーリーとしても、部分的にピックアップしても使える構成になっていることから、全体の時間配分をしながら、また、子どもたちの反応を見ながら「そろそろ本題に入ろうかな？」などと加減しながら使える点も、便利だと感じている。自分なりのオリジナルページも組み入れて、ブラッシュアップしながら活用し、そうした情報を、仲間たちと共有してゆけたらと思う。

(3年目サブボードメンバー)



「場所を選ばず使えるフリップに今後も期待」

高岡 由紀子 グリーン購入ネットワーク事務局
<http://www.gpn.jp/>

グリーン購入ネットワーク(GPN)では、環境負荷が小さい製品・サービスを優先的に購入する「グリーン購入」をテーマにした小中学校での出前授業や市民講座を行う機会がある。

グリーン購入の実践には、製品やサービスの一生と環境とのつながりを考えた上で、どの製品やサービスを選び、どのような使い方をすると環境負荷を低減できるのか、多面的・総合的に考える力を身につけることが効果的であるため、「どこでもフリップ」は地球温暖化の現状や予測から、日常生活が環境へ及ぼす影響、対策の実践事例まで伝える教材であり、多様な見方を学びきっかけを親しみやすく提供することができた。

その名のとおり、場所を選ばず、パソコンやプロジェクターがない教室で使うことができ、教室内の前後に移動して説明することもできるため、単調になりがちな説明に動きを出すことができる。また、講座の導入のクイズはもちろん、解説フリップのイラストは印象に残りやすく、限られた時間内のまとめにも有効である。今後、さらにクイズや実践にまつわるフリップが増えていくことを期待したい。

(1年目委員、2年目ワーキングメンバー、3年目サブボードメンバー)



「オリジナルの設問を加えてフリップを応用」

安井 レイコ みんなのエコイク推進協会会長・料理研究家

<http://ecoiku.org/>

私どもの団体は、幼稚園のお子さまからシルバー世代の方まで、幅広い年齢の方に環境に配慮した生活の仕方を工作や料理などの教室と絡めてお教えしている。また、料理研究家としては、環境とは関係のない教室を行うこともあり、どちらの場合も準備に時間がかかったり難しかったりするスライドや資料は敬遠されがちだ。

この「どこでもフリップ」は事前準備がいらず、その日の持ち時間に合わせて選ぶことができるので、とても便利である。

また、イラストを使用したクイズは、色使いも明るく楽しいので、年齢を問わず、どこでも喜ばれている。料理教室の前に「食品ロス」について、工作教室の前に「100年の温度変化について」などを提示し、さらにオリジナルの設問も加えて、色々な教室への導入として使っている。

同じ設問も繰り返すことで参加者の理解が深まり、周囲の方にお話しして下さる機会も増えるようだ。これからも、様々なシーンで活用したいと思っている。

(1年目委員、2年目ワーキングメンバー、3年目 ボードメンバー)



「異分野への働きかけで温暖化防止の輪の広がり」

徳野 千鶴子 川崎市地球温暖化防止活動センター推進員

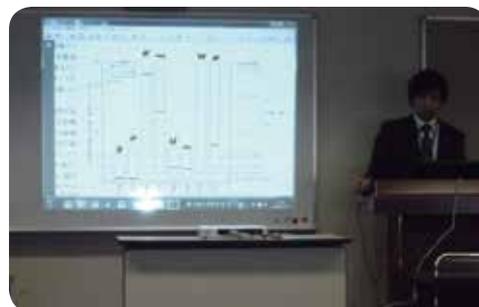
<http://www.cckawasaki.jp/kwccca/>

2015年11月29日、川崎市中原市民館で川崎市内の里山活動や花壇活動をしている団体の「花と緑の交流会」が開催された。参加者に地球温暖化についてのアンケートを行った結果、地球温暖化による生物多様性への影響が無意識のうちに実感されていることがわかった。

そこで、2016年1月19日、川崎市地球温暖化防止活動推進センターでは「生物多様性と地球温暖化」と題した講座を開いた。川崎市環境調整課の浅岡充係長の「生物多様性に関するかわさきの戦略」についての講演に続いて、「飲食・ガーデニングを通じて気候変動を伝える～どこでもフリップ活用ガイド」を紹介した。クイズを交えたフリップの内容はとても好評だった。

公園緑地の維持管理を行う花壇活動では、持続可能なガーデニングが目指されている。こうした活動に参加されているみなさんの気候変動への関心が高まる、つまり異分野への働きかけによって、温暖化防止の輪がさらにつながり、Fun to Shareが広がっていくことを期待したい。

(2年目ワーキングメンバー、3年目サブボードメンバー)



「体験から学ぶこと、異分野コラボの重要性」



森 高一
環境コミュニケーションプランナー



「やったことから学ぶ」こと

知識の伝授が主体となる講義型の学習にとどまらず、グループワークなど学習者が主体的に参画する体験型学習に注目が集まっている。昨今「アクティブラーニング」という言葉がよく言われるが、文部科学省でもこのアクティブラーニング(いわゆる能動的学習)を学校教育の中に取り入れようと、社会でも変化が起きている。

実際に「体験から学ぶ」ということは、一般の学習と何が違うのか。

重要なこととして、単に体験することで「学び」になるわけではないことが指摘される。体験学習法として理論化されているものだが、そこでの体験をふりかえり、それはいったいなんだったか、いっしょに体験した人はどう感じていたか、そしてそれはどうほかでも活かせるか、言葉による理解のしなおいをはかる。こうしたステップとフローによって、学びへとつなげる。

記憶することや知識が必要ないということではない。むしろ言語化して初めて「理解」が生じ、それをもとに言葉として他者に伝えることができる。その繰り返しからクリアな認識となり、そこから思考が動きだし、それに伴う行動へと連動していく。

しかしながらこれまでは、「体験型」と言っても何かみんなやっておしまいという教育が少なくなかった。必要なのは「やったことから学ぶ」という行為であり、そのための場と時間をどうつくるかにある。

長くワークショップや体験学習の現場を作ってきた経験から思うのは、本人の体験に基づく学びには納得の深度が違ってくるという感覚である。俗にいう「腑に落ちる」、まさ

に腹や体でわかるという次元である。これに理性的な知識の理解が合わさることによって、深い学びへと導かれる。

「日常取り組んでいること」をベースに

地球温暖化問題に取り組もうとするほど、問題の大きさや原因、影響とそれに対する対策が、一個人ではともしきれないと痛感する。膨大な情報も、専門的な知識や知見は多くの人の感覚を越えてしまう。さまざまな行動の提示はなされるものの、それで本当に解決できるのか疑念が残るのも否めない。はじめから当事者として関わることすら敬遠される恐れも多い。

地球温暖化対策をより広く社会化すること

そうした問題に対し多くの人が当事者として向き合い、日々の暮らしや社会そのものも適応させていくにはどうしたらよいか。まずはその人なりの感覚でしっかりとらえることと、根幹的なところに通じ納得感を持つこと、日常の行動の中でルーティーン化していくことなど、さまざまなアプローチが考えられる。

つまりは本人が日常取り組んでいることをベースに、それに結び付く地球温暖化という要素を加えていくスタンスである。まずは自分たちのホームグラウンドでとらえ、自ら対策を考えてみる。そうした体験と学びが当事者としての



受け止めにつながり、受動的な立ち位置から主体性へとつながるものとなる。これが個人にとどまらず集団や地域での展開に広げることができると、より社会化に近づけると考える。

今回の事業で取り組んだことは、地球温暖化に対して取り組む地球温暖化防止推進員の皆さん、それと「食」と「ガーデニング」の指導的な活動をしてきた皆さんとのコラボレーションを通して、地球温暖化対策をより広く社会化していくことである。

分野をつなぎ、地球温暖化防止推進員には新たなテーマのアプローチを得て、食とガーデニングの指導者には地球温暖化の要素を入れ込むことを目指した。こうした異分野の融合こそが、新たな可能性や価値を生み出す源となる。

特定のテーマで深めていくこと、少なからずその分野での世界観や閉鎖的な専門性が生じる。深めることは不可欠であるが、より多くの人に関わってもらおう広げるベクトルもまた必要である。

異分野との組み合わせからつくり出す

その一つの手法が、異分野のコラボレーションと言えよう。それぞれの世界観が合わさることで共感するところと

違いを理解し、さらに新たな可能性を発見する。そうしたことは今回の2つの分野に限らず、よりさまざまなテーマでなされることを期待したい。

これまでの地球温暖化対策で進められてきた人づくりやアクションプランにとどまることなく、より柔軟で広いアプローチを異分野とされる組み合わせからつくり出していく。その一歩は、地球温暖化に関する一つのフリップのクイズからかもしれないが、そうした機会の繰り返しから画期的なイノベーションが起こることとも限らない。異分野コラボレーションにはとても大きな可能性が見える。

(2年目委員、2年目ワーキング座長、3年目ボードメンバー)



コラム「異分野から飛び込んで」

自分自身も異分野(企業の事業立上や人事など、環境の「力」の字も関わりの無い仕事)から、地球温暖化防止活動を主眼におく当法人での仕事に就き、平成26年8月からこの事業の事務担当に、平成27年度からは、主担当として関わる事になりました。

これまでの経験や知識と異なる事業展開の中で出会ったボードメンバー・研修会参加者・地域センターの方々とのやり取りは本当に楽しく、新しい発見や緊張感にあふれ、このプロジェクトの面白さを実感させて頂きました。

「楽しくなければ、手軽でなければ、面白くなければ広がらない」という委員・ボードメンバー皆さんのお考えに驚き、そして腑に落ちるといった経験を、異分野から来た自分も体感。

各地でのプログラム実践をサポートさせていただく中、実践されている方々のイキイキとした笑顔、参加者の

皆さんの真剣なまなざしが各地で広がっていく事を肌で感じました。これからも「楽しくて、面白くて、手軽な」プログラムが広がっていくことを確信しています。

本事業の正式名は「市民の気候変動を意識した行動変容を促すための効果的な対象の選定とエンパワーメント・プログラムの開発」です。平成27年、主担当として関わるにあたり、この長い事業名を短く呼びやすく、しかもその名称の意図を失わないようにと思案し、「通称:Cプロジェクト」と命名させて頂きました。

『Climate Change、Citizen、Cross Culture、Carbon offset、&「しーちゃん」』など、様々な『C』が関わり絡み進めたCプロジェクト、これからも様々なCが加わっていく大きな可能性と期待の募るプロジェクトです。

地球温暖化防止全国ネット企画・広報グループ 松村容子